［集めよ！ジュニア会員！！］

②ジュニア会員から始まる学会活動の新たなステージ —なぜいまジュニア会員なのか—

西尾章治郎 情報処理学会第 29 代会長／大阪大学

学会が果たしてきた役割

学会活動の変容を述べるにあたっては，そもそも学術研究を主たる目的とする学会が，どのように捉えられてきたのかを振り返ってみることは重要です．ここで学術研究とは，「個々の研究者の内在的動機に基づき，自己責任の下で進められ，真理の探究や課題解決とともに新しい課題の発見が重視される」ものとされており，「学術研究はイノベーションの源泉そのもの」との認識が広まっています．

学会の起源は，中世からルネサンス期に至るヨーロッパにおいて，保守的な大学に反発した知識人が各々で集まって行った情報交換の場であったといわれています．その後，最も初期の自然科学分野の学会は，1660 年に設立されたイギリスの王立協会（Royal Society）であり，アイザック・ニュートン（Isaac Newton）を始め，第一線級の科学者が集結しました．この協会の持つ大きな意義には，「権威に頼らず証拠（実験・観測）を持って事実を確定していくという近代自然科学の客観性を強調する」ことを協会のモットーとしていることがあります．

日本においては，学術研究にかかわる学会を適切に規定しているのは，日本学術会議による次の認定規定だと考えます．日本学術会議は，学会の申請を受けて審査し，下記の 3 つの要件を満たすコミュニティを日本学術会議協力学術研究団体として認定しています．

(1) 学術研究の向上発達を図ることを主たる目的とし，かつその目的とする分野における「学術研究団体」として活動しているものであること
(2) 研究者の自主的な集まりで，研究者自身の運営によるものであること
(3) 構成員（個人会員）の数が 100 人以上であること

本稿では，この学会に関する従来の捉え方が，本会のジュニア会員制度によって大きな変革期を迎えていることを述べます．

情報処理学会の特徴

本会は大学などの教育・研究機関と企業などの産業界の会員がほぼ半数ずつの構成となっていることが大きな特色であり，情報処理分野の最先端の技術とその啓発および社会実装のすべてに責任を持っています．研究者・教育者と実務家がともに議論して互いを高めあう場を提供することが本会の重要な使命です．学術研究というカテゴリには，基礎研究，応用研究，開発研究という 3 つの段階が含まれていますが，その 3 つの段階すべてをカバーして，学会に求められる要件である学術研究の向上発達を実践していく観点からは，本会の特色である会員構成は非常に有効といえます．そのもとで，本会が目指す使命を果たしていくことは，本来学会が果たすべき役割を実践する上で大変大きな意義があると確信します．

なぜいまジュニア会員なのか

AI（人工知能）やビッグデータ処理などの最新のテクノロジーのメリットは，年齢や性別，居住地や職場に関係なく，日常生活で広く共有できることです．しかし，AI とデータテクノロジーのメリットを享受し，最新のテクノロジーを社会の多様な現場に適用するためには，目的を達するために適切に情報を活用することができる知識や技能，すなわち「IT（情報技術）リテラシー」が必要です． そのため，大学では，学問分野に関係なく，すべての学生に基本的な IT リテラシーを教えることが求められています．しかしながら，誰もが IT に容易にアクセスできるという社会的平等を実現するためには，実は大学教育からでは遅すぎると考えています．

実際，文部科学省は，小学校，中学校，高等学校のカリキュラムでの IT 教育の重要性および必要性に鑑み，2020 年度から基礎プログラミングスキルなどの IT リテラシー教育を強化します．

ただし，IT リテラシー教育では，単に IT に関する基礎的な知識や思考法を学ぶだけではなく，IT の負の側面，恐ろしさも学ぶ必要があります．たとえば，「デジタル・タトゥー」といわれるようなことです．「タトゥー」，刺青は，いったん，身体に刻まれると除去するのが困難です．同様に，いったん，インターネット上に出た情報は，それが軽はずみなものであっても，冗談であっても，消すことは容易ではありません．それにより，その情報内に書かれている人物が，本人の知らないうちに，ディジタル空間の世界で相当なダメージを受け，その人の生活が成り立たなくなる，ということも起きています．我々一人ひとりが，インターネット上の何らかのトラブルの加害者にも，被害者にもなり得ることを小学校段階から教えておくことが重要です．

これらのことを踏まえ，本会は，近年，若年層を対象とした「ジュニア会員制度」により新たな方向性を打ち出しています．

学会活動の新たなステージへ

本会は，社会的アウトリーチ，特に若い世代の育成を優先事項の 1 つと考え，現在，小中高校生，高専生本科～専攻科 1 年，大学学部1～3 年生を対象としたジュニア会員に無料でさまざまなサービスを提供しています．

若年層向けの企画強化の例として，本年（2019 年）3 月に福岡大学七隈キャンパスで開催した第 81 回全国大会では，新たに「中高生ポスターセッション」を開設し，37 チームによる発表から優秀な発表に対する表彰を行いました．会誌では「先生，質問です！」，「集まれ！ジュニア会員 !!」などの新連載をスタートしました．さらに，これらをはじめとするジュニア会員向けの読み物やイベントなどを紹介する「ジュニア会員のページ」[☆1] を本会 Web ページ上に新設し，積極的に情報発信をしています．

これらの施策により，2018 年度末にジュニア会員の人数が 1,642 名（2017 年度末より 860 名増加）となりました．将来，この中から 1 人でも多くの優秀な情報技術者が出てくることを期待しております．

先に述べた日本学術会議による認定規定によれば，従来，学会は研究者コミュニティによる学術研究の向上発展を使命とするものであったと言っても過言ではありません．本会は，情報処理が社会のありとあらゆる側面で大きな役割を果たしていることに鑑み，従来の学会の使命に加えて，「社会の中の学会，社会のための学会」となることを目指して新たなステージに向かうべく舵を切っており，学会活動のイノベーションに挑戦しています．

その新たな航海が実り多きものとなるよう，今後も本会の皆様とともに懸命に取り組んでまいりたく思います．皆様のご理解とご支援のほどを何とぞよろしくお願いいたします．

（2019 年 5 月 26 日受付）

☆1 https://www.ipsj.or.jp/junior/

西尾章治郎（正会員）
大阪大学 総長．1975 年京大卒業，1980 年京大博士修了（工学博士）．京大助手，阪大助教授，阪大教授，阪大理事・副学長などを経て，2015 年から現職．本会会長（第 29 代），日本データベース学会会長などを歴任．本会，電子情報通信学会，日本工学会，IEEE のフェロー．本会功績賞，文部科学大臣賞，紫綬褒章，文化功労者など受賞．